

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F-3「中世絵画」の「室町幕府の唐物奉行・相阿弥とその周辺」に展示されている作品について勉強してみよう。

あしかがしやうぐん け  
足利将軍家の学芸員  
のうあみ げいあみ そうあみ  
—能阿弥・芸阿弥・相阿弥—

室町時代、中国で作られた絵画や書跡、工芸品などは「唐物」と称され、日本のそれらとは比較にならないほど、凄く高い評価を受けていました。ですから、裕福で地位の高い人々はこぞってそれらを収集し、他人にみせびらかすことで、己の富や権力を誇示していました。喩えていうならば、一点数億円もするような宝飾品をいっぱい身に付けているとか、ガレージにフェラーリやポルシェなどなかなか手に入らない名車をズラリと並べているようなもの、と考えればよいでしょう。

では、その頃、そんな高価な唐物をいちばん多く集めていたのは誰か、ご存じですか？。そうです、足利将軍家にほかなりません。その収集は、あの金閣を建てた義満（三代将軍 1358～1408）の時代に活発化したらしく、銀閣の創建者・義政（八代将軍 1436～1490年）の頃には頂点に達したといわれています。さすがに将軍家コレクションの全体像までは掴めていませんが、おそらく日本中見渡しても例のない、きわめて質の高い中国絵画や工芸品が大量に蔵に収まっていたのは確かでしょう。

しかし、将軍自身が唐物に詳しくなかったわけではけっしてありません。唐物の価値や良し悪しなどを適切に判断する、唐物のプロともいべき人が将軍の側近の中におりました。いわゆる唐物奉行と呼ばれる人々であり、なかでも能阿弥（1397～1471）・芸阿弥（1431～1485）・相阿弥（？～1525）の三代（順に祖父・父・孫）は有名です。能阿弥は六代将軍・義教（1394～1441）や義政、芸阿弥・相阿弥はともに義政の信任を得て活動していました。

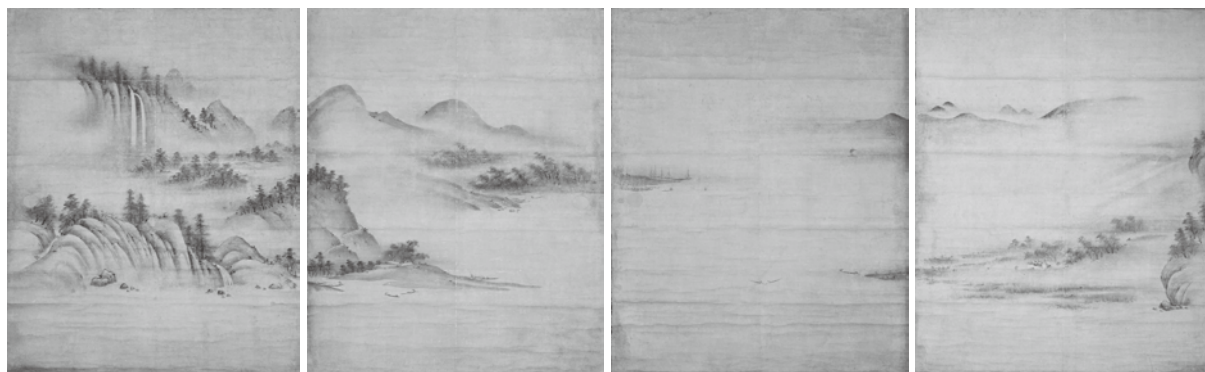


図1 重要文化財 瀟湘八景図 相阿弥筆 室町時代(16世紀) 京都・大仙院蔵

ここで、彼らの主な仕事を説明しておきましょう。まずは、コレクションの整理・保管業務。蔵の鍵は彼らが持っており、その許可なくして作品を出すことは出来ませんでした。また、作品を整理・保管したり貸し出すためには台帳が必要であり、それを作成するのも重要な職務でした。例えば絵画では画題や画家名のほか、その形状や材質、さらに画家の格付けまで細かく記されていたことが知られています。加えて、そのコレクションを充実させるために、中国で買い付ける唐物を選定したり（そのリストは遣明使節団に託されました）、大名家などからの寄贈品を受け入れた際は、その鑑定（ホンモノか否か見極めること）や値段付け（代付けといいます）を行うこともありました。さらに、将軍の命令によって作品を将軍邸などに展示することも多かったのですが（これを座敷飾りと呼んでいます）、その展示こそが彼らの腕の見せ所、本領発揮の場であったといっ  
てよいでしょう。このように述べてくると、「唐物奉行の仕事は今の博物館の学芸員がやっていることと同じじゃないか」と思われたことでしょうか。その通りです。彼らは足利将軍家お抱えの学芸員であり、美術顧問でもあったというわけです。



図2 重要文化財 遠浦帰帆図 牧谿筆 中国 南宋時代(13世紀) 京都国立博物館蔵

最後になりましたが、そんな唐物奉行の仕事とは別に、彼らが絵を描いていたことにも触れておかなければなりません。しかも、その絵の出来映えはプロ顔負けときているので（もっとも、芸阿弥や相阿弥はほとんどプロ化していた可能性があります）、本当に恐れ入ります。思うに、最上級の質を備えた中国絵画に普段から接していたことが彼らの目を肥やし、また高度な技術を身に付けさせる要因になったのでしょうか。事実、相阿弥の手になる「瀟湘八景図」（図1）は、当時、将軍家が所蔵していた牧谿（南宋時代の画僧）の「瀟湘八景図」（図2はその一部にあたる「遠浦帰帆図」）を参考に描かれました。両作品とも細やかな墨の濃淡を駆使することで、淡い光と湿り気を帯びた空気が表現されているのがわかりますか？。

美術室 山本英男